

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ①

リナシメント

緋月 まや

「そういうの、vacanza sabbatica(ヴァカンツァ サツパティカ)っていうんだよ」

イタリア語教師をしている友人が言った。辞書を引くと、それは、研究や休養のために大学教授らに与えられる有給休暇のことだとある。そう問い直してみたが、何人であれ、それまでしていた仕事から離れて、自分がしたいことをするための長期休暇は、イタリアではすべて vacanza sabbatica と呼ぶのだそうだ。

二十余年の新聞記者生活に別れを告げ、私は新しい人生を生きていくことにした。両親を見送った、ひとり暮らしの気楽さである。糸の切れた凧のように、くるくると飛び狂ってみたくなった。どこで朽ち果ててもかまわない。趣味で始めたばかりのイタリア語への恋心と、生涯変わることはないワインへの情熱を胸に。言い換えれば、ただの語学オタクの酒好きである。こうして、私の vacanza sabbatica は始まった。フィレンツェに住むようになって、もうすぐ二年になる。今日からスタートするこの連載では、ワインにまつわるエピソードを交えながら、ワイングラスの向こうに見えるイタリアをお届けしていきたい。

*

自らの再生の地にフィレンツェを選んだのは、文字通り、ここが Rinascimento (リナシメント/ルネサンス)の都だからだ。Rinascimento は十四世紀のイタリアで始まったとされ、フィレンツェはその中心都市であった。ri (再び) + nascimento (誕生)、それは人間性の復活を意味

する。神を世界の中心に置く中世西欧の価値観に代えて、古代ギリシア・ローマに倣い、もう一度、人間が世界の中心に戻って自由に生きていこうとする文化運動である。長らく、仕事を世界の中心に置いてきた人間が、自分を世界の中心に戻して生まれ変わるには、フィレンツェはぴったりの街だった。けれど、それは個人的な rinascimento (再生)のはずだった。まさか今ここで、イタリアというひとつの国にもまた rinascimento が必要になるとは、思うはずもなかった。新型コロナウイルスの襲来によって――。

昨年十二月の中国武漢市での発生判明から、ダイヤモンド・プリンセス号での集団感染確認の頃までは、さほどの緊張感はなかった。一月下旬にしつこい風邪をひいて、日本から持参したマスクをつけて語学学校に通った時も、イタリア人教師やクラスメイトの西欧人から「どうしたの？何があったの？」と不思議な顔をされた。「みんなにうつしたくないから」と答え、「へええ、すばらしい考え方ね」と称賛を浴びることもあれば、「マスクの効果は科学的に証明されていない」と跳ね返されることもあった。のんきなものだ。それが二月下旬、ロンバルディア州コドーニョの街でイタリア人の国内初感染が確認されたのを皮切りに状況は一転、フィレンツェでも、マスクは薬局から姿を消した。国公立の学校だけでなく、私立の語学学校も休校になり、授業はオンラインになった。3月9日夜、ジュゼッペ・コンテ首相はイタリア全土のロックダウンを宣言し、私たちの自宅待機「Io

resto a casa (イオ・レスト・ア・カーザ)」が始まる。外出は食糧や生活必需品、医薬品の購入などに制限され、経済活動は停止した。イタリアは一時、感染による一日の死者が九百人を超える、新型コロナウイルスの震源地になった。医療崩壊の危機に直面し、暗い影がイタリアを覆った。



【ロックダウン中、誰もいないフィレンツェのドゥオモ広場】

そんなある日、語学学校のクラスメイトから「Rinascero, Rinascerei (僕はよみがえる、君もよみがえる)」(*1)と題された YouTube 動画が送られてきた。ゆっくりと優しく、けれども力強く、その歌は始まる。感染者が集中した北部の中でも、特に被害の甚大だったロンバルディア州ベルガモ出身のシンガーソングライター、Roby Facchinetti (ロビー・ファッキネッティ)氏が故郷の復活を願い、叫ぶように歌う。この痛みに打ち勝ち、この壮絶な闘いの日々から何かを学び取り、再出発を果たそう。亡くなった方々への鎮魂、遺族への励まし、医療関係者への敬意を込め、熱く語りかけてくるその声に、世界中に共鳴の輪が広がっていった。この、折れることのない再生への祈りは、イタリア全土の祈りでもある。第二次世界大戦後、人口の大部分が戦争を知らない世代と

なった幸運な国々では、新型コロナウイルスの襲来まで、このような負の非日常を体験することがなかった。あす何が起こるかわからない、私たちを取り巻く世界がどこへ向かっているのかわからない、その薄闇を手探りで進む心許なさ。それでも、私たちはみな、この非日常を日常に替えて、生き直す道を切り拓いていかなければならない。

呼びかけに応えるように、ワイン界にも、コロナ後のそよ風が吹く。ひとつは「ワインの窓」(bucchette del vino)の復活だ。フィレンツェ旧市街を歩いていると、ところどころで、建物の壁にアーチ型の小窓を見かける。それが、「ワインの窓」だ。ワインの窓協会(*2)のMatteo Faglia (マテオ・ファリア)会長によると、少なくとも十六世紀後半から二十世紀半ばまで、フィレンツェを中心にトスカーナ州で使用されていた。フィレンツェ旧市街では約百五十の小窓が確認されている。郊外に農園を所有する貴族たちが、この小窓を通じて、フィレンツェの屋敷でワインを販売していた。不特定の購買者を屋敷に入れることなく販売できるため、防犯面で優れていたわけだが、十七世紀前半には、ソーシャルディスタンスの概念を持ったワインの受け渡し窓口として、ペスト感染防止に一役買った。商業形態の変化に伴い、活躍の場を失っていったのだが、時は巡る。2020年、新型コロナウイルスとの闘いに、この歴史的小窓の再利用を決意した飲食店店主たちがいる。レストラン「Babae(バツペ)」では、ロックダウンの段階的解除初日、レストランのテイクアウト営業が許可された5月4日から、この小窓を通してワインを販売している。オーナーの一人、Chiara Cati (キアラ・カーティ)さんは「伝統がくれた知恵を今に活かさなくては」と、微笑む。コロナ後、ワインの窓協会では、年間三万人だったサイト訪問者が、八月だけで九万人に急増した。Faglia 会長は「ワインの窓を忘れていたフィレンツェ人自身が、その価値に気づき、観光ツアーに組み入れ始めたガイドたちもいる。ワインの窓が、新時代のフィレンツェ名所になればいい」と、明日を見すえる。

もうひとつのそよ風は、aperivigna (アペリヴィーニャ)だ。葡萄酒(ヴィーニャ)で楽しむアペリティーヴォ(*3)のことで、今夏よく耳にするようになった。6月3日、三カ月に及ぶロックダウンが完全に

解除されると、イタリア国内の移動が自由になり、家族だけではなく、友人同士でも気軽に外食できる空気が戻ってきた。元来、家に閉じこもっていることが嫌いで、おしゃべり好きなイタリア人が、オンライン飲み会で満足できたはずもない。とはい

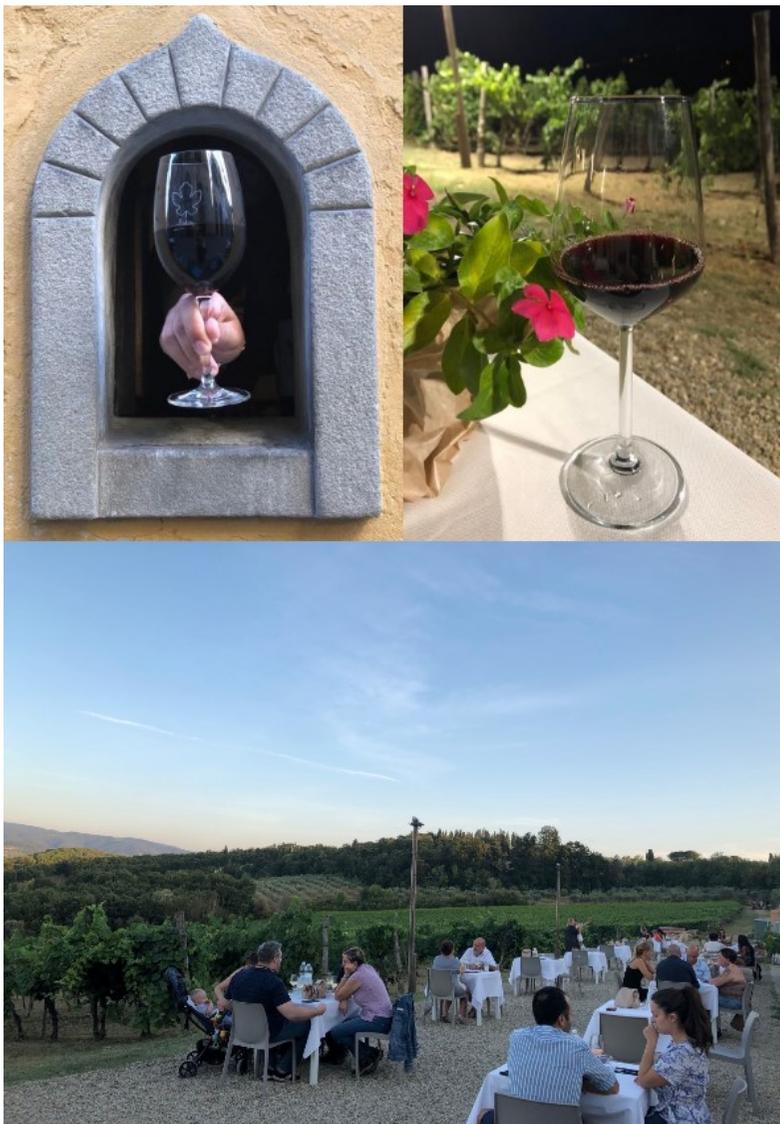
え、依然、密閉も密集も避けなければならない。ワイン生産者たちは、そこに目をつけた。フィレンツェ郊外のワイナリー「Podere Ema(ポデーレ・エマ)」の Enrico Calvelli(エンリコ・カルヴェッリ)最高経営責任者も、その一人だ。「国外観光客からの収入が見込めなくなり、地元客に照準を合わせ、ソーシャルディスタンスを保ちながら屋外で過ごすイベントを企画する必要があった」。6月17日から、ワイナリー開設以来初めての aperivigna を試みたところ、平均して、一晩あたり八十席中の六十席が埋まる盛況ぶり。広大な葡萄畑で、夕陽を愛でながら楽しむアペリティーヴォは、コロナ後にふさわしい癒しのひとときとして、私たちの心をとらえた。

イタリア人の国民性として、日本人の中に定着したステレオタイプの陽気なイメージとは別に、arrangiarsi(アツランジアルシノうまく切り抜ける)の才能がよく挙げられる。日本に比せば、何事につけ秩序立って行動することの苦手なこの国だが、対照的に、混沌とした状況を切り抜けていくための個々人の柔軟な発想力は際立つ。美しきイタリアの再生に向けて、今こそ、その真価が発揮されることを願ってやまない。

*1 「Rinascero, Rinascerei」:ロビー・ファッキネッティ氏は、イタリアのロックバンド「イ・プー」のメンバーとして知られる。邦訳「僕はよみがえる、君もよみがえる」は、指揮者の三澤洋史氏 HP から。この曲の著作権、YouTube のダウンロードによる収益はすべてベルガモの聖ヨハネ二十三世病院に寄付される。

*2 ワインの窓協会:「ワインの窓」研究と保存を目的に2015年発足。<https://buchettedelvino.org/>

*3 アペリティーヴォ:本来は食前酒の意だが、今日のイタリアではアルコール飲料と共に楽しむ軽食を指す。



【上左:コロナ感染防止の知恵としてよみがえる「ワインの窓」(8月28日、Babae)

上右:月明かりの葡萄畑で一杯

下:コロナ後にふさわしい癒しのひとときとして、葡萄畑でのアペリティーヴォが人気を呼んでいる(共に8月12日、Podere Ema)】

(ライター、イタリアソムリエ協会/AIS 認定ソムリエ)

『こんな夏には《お話あそび》を』

竹田 理乃

日差しを浴びただけでヤケドしてしまいそうな酷暑に、出歩きたいという気持ちも起こらない日々が続きました。新型コロナウイルスと熱中症というふたつの敵を相手取るには、そもそも出歩くべきでないのは承知でも、あまり人に会えないまま、同じ窓ばかり眺めていると、やはり減入りがちになってしまいます。からだは自由にならないときに限って、会いたい人や行きたい場所が頭から離れなくなってしまうのもありがちなことですし、コレンテをお読みの皆さまは、きっとイタリアが恋しくて仕方がないことでしょう。

ひらがな・カタカナが誕生するまえに使われていた万葉仮名で〈恋〉と書くとき、その音に対して〈孤悲〉と漢字をあてる場合があるというのは有名ですが、遠く離れた存在のことをひとり悲しく思い描くことが増えると、旅先などでたまに訊かれる「どうしてイタリアに恋したの？」という質問にある〈innamorarsi / 恋に落ちる〉という単語にも、親しみが湧いてきたような気がします。今までは照れて「イタリアが好きな理由は」と〈piacere / 好む〉に言い換えて返事をしていましたが、もし次の機会があれば〈innamorarsi〉で堂々と答えてみたいと思います。

次の旅行といえば、航空券を取って具体的に計画を立てるのもいいですが、たとえば見慣れた車窓の風景を眺めながら「もしこの電車が向かっている先が、大阪駅じゃなくてナポリ中央駅だったら……」などと、とりとめのない空想をするというのも心が躍ります。空想のなかでなら、行きたいところすべてを目的地にできますし、誰にだって会えます。忙しくてなかなか予定の合わない友人とも、かつての旅行でちょっと話しただけの人とも、今はもういない人とも、空想のなかでなら手を取り合って、すてきな時間を過ごすことができます。そして、電車に揺られての白昼夢は、降車駅のアナ

ونسとともに醒めてしまいますが、もしその内容をことばにできれば、それで立派に《お話あそび》が成立します。

イタリアを代表する児童文学作家ジャンニ・ロダーリは、その著書『ファンタジーの文法』に〈もし…なら、どうなるだろう？〉というタイトルの章を設けて、物語創作のヒントとしての《ipotesi fantastica / ファンタスティックな假定》について説明しています。

もちろんロダーリにかかれば〈もし君たちの乗ったエレベーターが地球のまん中に落ちるか、月の上にひょっこり現れたら、どうなるだろう？〉と、刺激的な方向へ急カーブでお話を突っ走らせることができますが、まだ頭の準備運動が終わっていない私たちは、まず「もしこの電車がナポリに着いたら」くらいから始めてもいいはずですよ。



【パレルモの海】

もし、いつもの電車がなぜか梅田ではなくナポリに着いたら、私はすぐに飛び降りて、以前の旅行でとても気に入ったトラットリアに直行します。高齢だったご主人が今もお元気かは分らないのですが、空想のなかではあと100年だって、いつも店頭でにこにこ笑っていてくれます。それからティレニア海を船で渡って、友人のいるパレルモに立ち寄ってから、シチリアのおヘソと呼ばれているエンナへ。シチリア島のほぼ中央に位置するこの山上の街について、あるパレルミターノが

「見晴らしはいいけど、太陽が近いから地獄みたいに暑い」と言ったのに対して、「山の上は涼しいものだと思うんだけど」と口を挟んだところ、にやにや笑いで「きみは行ったことがないでしょ」と一蹴された思い出があり、一度は灼熱のエンナを体験してみなければ納得できません。エンナの次に目指すシラクーザは、日本だと太宰治の『走れメロス』の舞台として知られています。こんな暑い日に恋しくなる名所といえば、まずは涼しげなアレトゥーサの泉です。美しいニンフが姿を変えたものだという伝説が残る、海のすぐそばの真水の泉なのですが、ここまで空想のなかを歩き回ってきたら、そろそろファンタジックな方向へ進んでみても、照れてしまわずにすみそうです。

真夏のシラクーザに閑古鳥が鳴いているとなれば、いつも世界中からやって来る観光客の熱い視線を受けているアレトゥーサは寂しがっているのでしょうか。それとも、久しぶりに地元の人と穏やかに過ごせる夏を、のんびりと満喫しているのでしょうか。州立パオロ・オルシ考古学博物館で、美しいコインのコレクションについて説明してくれた職員さんが、その裏に描かれたアレトゥーサの横顔を、どんなに誇らしげに披露してくれたかを、真っ青な海から潮風の吹き渡ってくる泉のほとりで彼女に語ってみて、どんな表情を浮かべるのか試してみたい気がします。



【アレトゥーサの泉】

さて、このまま「もし日本人旅行者がギリシャ神話のニンフと現代イタリアで休日を過ごしたら、どうなるだろう？」と考えるのも楽しそうですが、このあたりでお話をジャンニ・ロダーリに戻します。

イタリアという国の文化に親しみ、握手はもちろんのこと、キスやハグなどの挨拶の魅力を知ってから、大切にしている相手へ触れられないとき、ふと心細さを感じるようになってしまいました。大人になってから味を占めた私でも寂しいのに、そうした習慣のなかで生まれ育ったイタリアの方々にとって、ロックダウンの日々がどれほど厳しかったことかと思いやられて、胸が痛みます。

手すら触れあえないといえば、ロダーリの『パパの電話を待ちながら』という作品は、イタリア各地を飛び回るセールスマンのビアンキさんが、まだ幼い娘との約束を守り、毎晩ひとつずつ電話口で語ったお話を集めたものという設定を与えられた短編集です。原題の“Favole al Telefono”を、翻訳家の内田洋子さんは訳者あとがきのなかで「電話で聞かせたお話」という表現で紹介しているのですが、眠たい目をこすりながらパパの電話を待っている娘さんと、まだ交換手という職業があった時代の電話に向かってお話をするビアンキさんが、日本語とイタリア語のタイトルで裏表になっているようで、翻訳を通して向かい合った2人の姿を、私はとても美しいと思っています。

この夏、お盆休みに会いたかった人へ、とりあえず電話だけでもかけてみたというエピソードを、よく耳にしました。ことばと声で楽しい時間を共有することは、ロダーリの得意分野です。先ほどご紹介した《ファンタスティックな仮定》も、ことばで繋がっている相手と遊ぶのにぴったりのツールとしてオススメです。

ロダーリによると、《ファンタスティックな仮定》の火付け役をつとめる〈もし……なら、どうなるだろう？〉という問いをつくるのに必要な準備は、無作為に主語と述語を選ぶだけです。この〈無作為〉というポイントについては、同じく『ファンタジーの文法』の4章《ファンタジーの二項式》で取り上げられています。

物語は《ファンタジーの二項式》によってのみ誕生しうる。

《馬一犬》は、真に《ファンタジーの二項式》にはならない。動物学上の同一種内の単純な連想である。二頭の四つ足を思い浮かべてもつ

まらないはたらきかしない。(中略)

ふたつのことばの間には、ある距離が必要である。一方のことばが他とまるで関係のないこと、およびその近接がかなり異常であることが必要である。なぜなら、想像力というものはそれらの間に類縁関係を設置し、ふたつの要素が同居しうる(ファンタスティックな)集合をつくり出すために活動を開始することを余儀なくされるからである。したがって、偶然の助けをかりてファンタジーの二項式を選ぶのもよいことである。

つまり《ファンタジーの二項式》から得られるお話のタネの育て方のひとつが、《ファンタスティックな仮定》だというわけです。

って、通話サービスのあちらとこちらで単語を出し合って、ゲームのように《お話そび》をスタートしてみてもいいですし、もっとさりげなく、通話相手が話題に出した単語を「ねえ、さっき列車旅行がしたいって言ってたけどさ」と捉まえて、そのまま「もし明日の通勤列車が、そのままナポリに着いちゃったらどうする？」と会話のハンドルを切ってみるのも愉快そうです。

相手が「なにそれ」なんて笑ってくれたら、こちらのもの。この機に乗じてご家族や恋人、お友だちを空想イタリア旅行へ連れ出して、もし一緒に楽しめそうなら、いつか準備が整ったタイミングで、私たちの愛する本物のイタリアへも誘ってあげていただきたいところです。

(当館語学講師)



【『パパの電話を待ちながら』表紙】

出典: <https://www.amazon.co.jp/gp/product/4062149710/>

ロダーリは《ファンタジーの二項式》を生み出すために、黒板を挟んでひとりずつ立った子ども達に、それぞれ思いついた単語を同時に書いてもらったというエピソードも紹介しています。それに倣

～会館だより～

<オンラインレッスン始めました>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におススメ!

- ・関西圏以外や外国にお住まいでイタリア会館でのレッスンが受けられない方
 - ・この時期の公共交通機関のご利用に不安がある方
- 受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>